

## 新ビジョン企画委員会 第1回会議 議事録

1 日 時：令和3年4月19日（月）15:00～17:00

2 場 所：兵庫県庁2号館 2階 参与員室

### 3 出席者

委 員：石川委員長、阿部委員、大平委員、織田澤委員、坂本委員、永田委員、  
中塚委員、野津委員、松永委員、丸尾委員（以上10名）

県 側：谷口政策創生部長、池田計画監、守本ビジョン局長、木南ビジョン課長

### 4 内容

#### （1）谷口政策創生部長挨拶

コロナの第4波ということで、兵庫県もまん延防止等重点措置が適用され、不要不急の外出自粛を呼びかけているところだが、今回、兵庫の新時代を拓くビジョンづくりを進めるために、火急の用務として、委員会第1回会議を開催したところ、ご理解、ご協力をいただき、お礼を申し上げます。この会議室も感染防止には十分配慮をしているし、オンラインでの参加をいただきつつ進めていくので、よろしくお願ひしたい。

本県が長期ビジョンを策定したのは、今から20年前の平成13年になるが、当時は、総合計画を掲げる地方公共団体が大宗を占めていた。しかし、この20年で、地方公共団体を取り巻く環境は大きく変化し、今後の取組に枠をはめるような総合計画は時代に合わなくなっている、あるいは、地域づくりで多様な主体の連携、協働の重要性が増し、目指す姿を幅広く共有し、行動につなげることを求められている。こうしたことを考えると、ビジョン策定の意義は、これから先も変わることがないと考えている。

昨年来、新ビジョンづくりに向けて、研究会での意見交換や、幅広く県民の皆様の未来への夢や希望をお聞きする取組を進めている。本年度も引き続き、そのような作業を進めつつ、年度の後半にビジョンを仕上げる作業につなげていきたいと思っている。

その過程の中で、初回の会議となる本日は、議題として2点お願いすることになる。1点目は、新ビジョンのコンセプト、2点目は、伝わるビジョンのあり方である。行政の計画ではなく、県民のビジョンとして、県民に共感されるものとしなければならない。そのための見せ方、アイデアについて、ご意見をいただきたい。

一昨年9月から立ち上げた将来構想研究会からお世話になっている先生方には、引き続きとなり大変恐縮である。今回、新たにご参加いただいた先生方には、専門分野の知見はもとより、県民、生活者としての視点からもご意見をいただければありがたい。

#### （2）事務局から委員会の設置趣旨を説明（省略）

#### （3）委員長選出

事務局の提案により石川路子委員に決定。

#### (4) 委員長挨拶

一昨年度から将来構想研究会で議論してくる中で、皆さんがそれぞれ素晴らしい知見を持っておられることがわかり、私自身も興味深く聞かせていただいた。新しいメンバーも含めて、それぞれの強みが一つとなって、新しいビジョンがより良いものになるように、私もお手伝いできればと思っているので、よろしくお願ひしたい。

#### (5) 委員長代理選出

石川委員長の指名により織田澤委員を委員長代理に決定。

#### (6) 事務局から本日の論点を説明（省略）

#### (7) 意見交換

##### 石川委員長

資料が盛りだくさんで、初めての方は追いつくのが大変だと思うが、一昨年度から始まった将来構想研究会におけるいろんな立場からの意見をまとめたのが将来構想試案である。この内容を一気に理解することは難しいとは思うが、今年度の目標は、ここから新ビジョン案をまとめることである。そうは言っても、意見を集約させるというよりは、それぞれのご専門の立場から、忌憚のないご意見をいただく会議としていきたい。

資料2をご覧ください。先程事務局から説明があったように、本日は論点1と論点2の二つの論点がある。論点2に関しては、ビジョンを打ち出しても県民に伝わらなければ意味がないということが出てきた論点かと思うが、できれば本日は初回なので、論点1に集中して皆さんと意見交換できればと思っている。

今後私たちが考えるべきは2050年。まだまだ先とはいえ、意外に早いゴールなのかもしれない。2050年ということ踏まえた上で、兵庫のめざすべき姿、目標、ビジョンは何かということ、ここで皆さんと議論したい。

めざすべき姿をお話いただくことは難しいかもしれないが、新しい兵庫づくりに当たって基本に据えるべき姿勢、あるいは、これからこういうことを考えていかなければならないのではないかといったことをご提示いただいても構わないと思っている。

資料2の裏面に事務局から6つに分けてキーワード例が提示されている。将来構想試案に連動していると思うが、キーワードに関連してお話をいただいても構わないし、新しいキーワードを出していただいても構わない。

今日に関しては、最終的には、新ビジョンを作らないといけないということはあるが、その目標をある意味無視して、あまり皆さんの議論を集約させることなく、いろんな意見をいただく場にしたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

## 阿部委員

石川先生と同じ甲南大学で教員をしている。文学部だが専門は社会学で、他の大学は社会学部という形が多いと思うが、社会学の方でやっている。社会学の中でも労働社会学が専門で、産業社会学とか、職業社会学とかいろいろ呼ばれるが、働き方に関する調査研究をしている。将来構想研究会では、特に雇用などの面で発言をさせていただいた。

今回のビジョンに関しては、昨年からずっと繰り返し研究会の方で揉んで、これだけ分厚い将来構想試案ができあがって驚いている。試案でいうと、未来シナリオ23が、私がいつも発言している分野になる。社会学の労働の分野に関する柱は、主に集中から分散へ、つながりの再生、個性の追求といった辺りになっている。

未来シナリオの「自由になる働き方」に関して、現在の世界的な雇用の流れで、ギグエコノミーや流動化が高まるという話、サラリーマン社会が過去のものになるという話は、放っておけばそうなる、そのまま何もしなければこうなるということで、しかもその潮流は逆らうことができないものである。

県民の中には、これを見て不安に思い、自分にできるかな、怖いなど思う方も多いと思うので、これを前提とした上で、もう少し積極的な明るい提案がほしいと思う。

職業に関して言うと、海外では、オーガニゼーションからオキュペーションへということがすごく言われている。組織から職業へという流れがある。未来シナリオに書かれている自由になる、みんなバラバラで、いろんな仕事を組み合わせて生きる、ということを経済学では、アトム化、個人化というが、これは多くの人にとっては不安である。

これまで組織にしがみついで生きてきたのに、いきなり自由に生きてくださいと言われてたら不安になる。そういう時に、何が心のよりどころになるかということ、組織のために働くのではなく、職業のために働く、ということ。

職業とは何か。尾高邦雄という職業社会学者は、社会の中における自分の役割が実感できるようなものを職業と呼ぼうと言っている。

もちろんいろんな仕事をするのはいいが、軸になるような自分の役割、例えば、うちは歯科医だが、歯科医という社会的役割を持ちつつ、いろんなことと組み合わせていけるようにしてあげることが大事だろう。

単にいろんな仕事をやらせて経済的に自立しましょうということは、市場原理、グローバル化の中で放っておけばそうなることなので、そうではなく、行政として、そこに何かもう少し、違った側面から仕事のあり方を示す必要があるのではないかな。

キーワード例の2の社会の連帯を重視する方向性に関して、「連帯」というとぼやけるが、社会学でいう連帯には、有機的連帯という言葉がある。社会を一つの有機体とみなして、それぞれの役割でそれぞれの機能を果たすことによって、例えば、神戸市なら神戸市、兵庫県なら兵庫県という生き物を動かしていくという考え方だ。連帯＝みんな仲良くしましょう、同じ気持ちになりましょうということではなくて、それぞれの役割を果たすこと

によって社会を動かしていく、そういうイメージで連帯を捉えることが大事だろう。

これまでの働き方は過去のものになる、テレワークをやりましょう、いろんなところで働きましょう、ギグエコノミーが広がりますよ、でも、それで何がどうなるのか、何のために働くのか。そこを示すことができれば、県民の方も安心するのではないか。未来の社会では、このために働くようになる、こういうモチベーションで働くようになるという部分を付け加えることができたなら、さらによくなるのではないかと思う。

## 大平委員

一昨年度からの研究会に参加し、現在進行中の阪神新地域ビジョンでもお世話になっている。専門は、造園学、ランドスケープで、人と自然の共生、まちづくり、景観づくり、地域資源や文化遺産をどう活用していくかという仕事をしている。普段は、三田市にある人と自然の博物館を兼務していて、大学教育以外に子どもたちと関わる機会が多い。

今回取りまとめられた試案をどんなふうに伝えたいかと考えたときに、他の都道府県にはない兵庫県だからこそ、こんな多様な未来シナリオが描けるというところに尽きると思っている。実現できるかどうかはわからないが、理想とするシナリオをたくさん提示する形で取りまとめられたのは、兵庫県でしかできないことだと思う。これがしっかりとコンセプトとしても伝わるようになればよりよいのではないか。兵庫県を選んでもらう、兵庫県を一旦出た方にもう一度兵庫県に来てもらう、兵庫県なら何か可能性が広がるのではないか、そうしたことを伝えるということ根底に据えるべきではないか。

人と自然の関係では、兵庫県はコウノトリをはじめとした生物多様性の保全に先進的に取り組んでいる。鳥獣対策や、阪神・淡路大震災の経験をもとにした防災・減災なども他府県より進んでいる。自然との共生にも積極的に取り組んできた。生態学的には多様な共生関係が築かれた多様な生態系は安定性・復元性のある環境と考えられ、非常に住みやすいと言えるのではないか。自然との共生自体がコロナもあって歪みつつある大都市圏においても、多様な人と自然の関係が築かれた兵庫県は安心だということもアピールできるのではないか。

このように、兵庫の特性として五国や多様性が挙げられていて、個々の地域が、自然にしても、文化にしても多様であるために多様な未来シナリオが描けるという構図はわかりやすいが、どんな人に見てもらおうか、理解してもらいたいかと考える際には、たくさんシナリオを示すだけではどこをめざせばいいのかがわからない、共有できないということがあると思う。

コロナ禍でバーチャルな空間が、現実空間と、ほぼ一体の形で社会に広がっていく中で、次の社会を担う子どもたちや若い世代の方が、しっかりと自信を持てる自分の目的をこのビジョンの中に見いだせることが大事ではないか。

冊子などの媒体も大事だが、それとともに、伝えるためのいろんな運用上の施策を合わせて展開していく必要がある。特に人づくりに関わるシーンにおいて、子どもや若い人が、

人に実際に会える、地域を体験できる、未来シナリオが直接実体験につながる機会をつくることも合わせて必要ではないか。

兵庫県では中学2年生に対してトライやるウィークという職業を学ぶ機会を提供するユニークな兵庫型体験学習を推進していることは重要な機会の1つである。しかし、中学2年生で見る職業のあり方と、幼稚園で見る大人のあり方と、高校生で見るあり方は全然違う。成長段階に応じて、いろんな職業や、自分のキャリア、働き方を考えるタイミングがあるとよいのではないか。そういったところの具体化を働きかけるようなことも合わせて考えていくべきである。

### 織田澤委員

工学部で、国土計画や都市計画、小さな単位で言うと、地域やまちづくりといったような分野を専門にしている。研究テーマは、経済学的な分析手法を使って、交通インフラの整備効果を測ったりしている。いろいろ興味が広がっているが、こういう機会から刺激を受けて、いろんなことにチャレンジしていきたいと思っている。

大きな論点なので、どう立ち向かったらいいのか難しいが、ざっくばらんに話をしたい。専門分野の視点から、将来30年先を見越した時に、どこまで社会が変わっているのかとまず考えてみた。モビリティ革命という言葉がいろんなところで聞かれるようになって、技術的には、そういう芽吹きみたいなものがある。

しかし、研究会でも何度か申し上げたが、技術はあくまでも課題の解決とか我々の生活の改善に寄与するものであって、それ以上に大切なのは、なりたい姿をしっかりと見据えることだ。論点のところ、めざす姿、価値、哲学という言葉があるが、いろんな考え、立場が違う方と、この部分をガチンコで議論することが大切だと思っている。

また、兵庫県という括りで考えたときに、先程の阿部先生の話の中にもあった役割は何かということについて、再定義をしないと30年先を見据えられない。

研究会で言ったことで今でも覚えているが、パターンリスティックに兵庫県に愛着を持つように教育したらいいのではないかと言ったが、それが許されるのは、そこに共同体としての価値があると言える場合だけだ。兵庫県という共同体に価値があるという前提に立って議論するのではなくて、兵庫県が県全体の中で、どういう役割を担っていけばいいのかと言うことは、やはり避けて通れない問題だと思っている。

資料2の裏面にキーワードがたくさんあって、どれも素晴らしいと思うが、例えば1番と2番は両立が難しい、また3番と6番は相反する対立軸だ。求められていることは、これらの間でうまくバランスを取っていくことではないか。

私も民主主義が絶対正しいと思って生きてきたが、そういう考え方が本当に正しいのか、最近の政治の世界のいろんな動向を見て思う。そういうことを考えると非常に疲れる。これでいいんだと思って生きている方が楽だが、本当はどうなのかと一個一個考えていくとすごく疲れる。しかし、これからはそういう時代、疲れるが、何が正しいのかと常に考え

ないといけない時代になるのではないか。そういうことの上に、社会としての思慮深さ、粘り強さのようなものが出てくるのではないか。この辺りが、教育の非常に重要な課題と  
思っている。そういった観点から今後も皆さんと議論をさせていただきたい。

## 坂本委員

委員の中で、唯一民間企業の間人である。皆さんに対して非常に失礼な発言が多いかもしれ  
ないので、先にお詫びをしておく。

2年前にひょうご経済・雇用活性化プランの会議の委員をして感じたことは、民間企業  
と役所の方、大学の先生との間にかなりギャップがあること。スピード感が民間企業とま  
るで違うというのが正直なところだ。

経済・雇用活性化プランも、最終的に分厚いレポートを作って、はいできました、以上  
終わりとなって、私の周りの県民に、それを知っているか聞いても誰も知らないと言う。  
結局、県民にとっては何の役にも立っていないのではないかと、ということが現実にある。  
この会は、そういった形で終わらせたくないという思いを持って参加している。

民間企業ではスピード感が大事であり、大義名分、錦の御旗を作るのは後回しだ。実際  
に自分たちができることをまず考えて、そのアクションが果たしてどういう課題を解決で  
きるかは後付けで考える、解決するテーマを後で考えていくという形になっている。

今日の論点でギャップを感じたのは、すこやか兵庫や、兵庫県の特性を重視した美しさ  
といった言葉。実際の県民の声は明確に、医療と福祉がよりよくなること、犯罪に巻き込  
まれないこと、交通事故を減らすことが大事だと言っている。

民間企業は、お客様の声を吸い上げて、お客様に対してサービスを提供する。行政も同  
じで、税金を払ってもらって、県民にサービスを提供する。大学であれば、いい会社に入  
りたい、あるいは知識を得たいという学生が学費を払い、先生たちは教えるわけで、お客  
さんは学生。私の会社であれば、こうした靴を買ってくれる中学生がお客様で、私の給料  
はそこから出ているということになる。

そこで思うのは、私たちの今回の役割は、2050年には兵庫県をこうしてほしいんだとい  
う県民の声に対する、何らかのアクションプランを考えることではないかということ。

私のやっていることを例に挙げると、今、三木総合防災公園で、5Gを使って、そのエリ  
アのスポーツDXを進める事業を、複数の企業と一緒にやる。具体的には県民の健康増進と、  
子ども・高齢者の見守りを進める。県民がこういうことをしてほしいということに対して  
アクションするということを宣言している。来月頭から現地に機材を設置していく。

そのように県民が望んでいる未来の姿に対して、こういった手段でそれを実現しようとい  
うことをこそ、この委員会で話し合うべきだと思う。

骨太の将来像という説明があったが、骨太、骨細は何を基準に評価するか。少なくとも  
当社では、骨太とは、実現可能性が高いことをいう。実現しない未来なんて言うのはやめ  
ようというのが、私どもの会社の方針になっている。

この会社のやり方が正しいかどうかはわからないが、少なくとも、2050年のめざす姿に対して、こういうことをやるということが県民に伝わるビジョンのあり方を話し合うべきではないか。

また、それを県民に伝えるのに、レポートを作ったので見てくださいますかでは誰も見ない。SNSで発信したところで、県のSNSを高校2年生が見るかという期待は薄いと思う。

県民を巻き込んで、2050年にこんな世界をこの県で作るんだということを、例えば500万人の県民がいるのであれば、その1万分の1のスケールの500人を対象にした実際の姿を作ってしまうと、そこに県民も参加してもらおう。例えば三木市のあるエリアを対象にそういうことをやる。それが県民に対して一番伝わる形ではないかと考える。

## 永田委員

昨年度までの研究会では、本当にたくさんの議論をして、私自身とても勉強になった。新しいビジョンが少しでもよいものになるよう頑張っていきたい。

私は家族社会学を専門としている。家族の中でも、とりわけ結婚、妊娠、出産の辺りが専門で、若い人たちの話を聞く機会が非常に多い。また、私は兵庫教育大学に勤務している。加東市という西脇の少し手前にある市にあり、田んぼに囲まれた中にぽつんと大学がある。県のビジョン課や神戸大、甲南大の先生方の話を聞くと、とても都会的だとも思う。兵庫県は非常に広い。神戸だけではなく様々なエリアがあって、それぞれに地域性がある。このことを念頭に置いておかないといけない。ここに兵教大からこの会議に参加する一つの意義があると思っている。

もう一つは、県のビジョンというものを考えたときに、やはり若い人たちに響くようなものであってほしい、なぜなら未来を作るのは若い人だから、という思いがある。教員養成の大学で勤めていて、子どもたちの未来を担っていく立場の、小学校・中学校・高校の教員を日々養成している。若い人たちに関して、私自身が具体的にどういった研究をしているかという、例えば、ZOOMを使った育児支援や、Iターン・Uターンの若者たちのコミュニティづくり。また、私自身が音楽好きということから、県内のロックフェスティバルの企画をしている若い人たちに話を聞いたり、シェアハウスや住み開きといったような変わったスタイルの住まい方をしている若者たちの話を聞いて、新しい家族のあり方、ジェンダーバイアスからより自由になって、その人らしさが生きるような具体的な暮らしとというのはどういうものなのかといったことについての調査研究を行っている。

その立場から今日話を聞いていて思ったことは、紙ベースにどこまでこだわる必要があるのかということ。私自身、2年ほど前からシェアハウスについてのいろんな調査をやっているが、ドキュメンタリーの映画などが若い人たちに訴求力がある。

IターンやUターンをしている若い人たちが例えば商店街のドキュメンタリー映画や、高齢者がどういう暮らしをしているのかという映画を見て、それでオンラインで討論会をやっている。そういう活動を通じて、その映像の中にある地元の美しさとか暮らしぶりとい

うものを再発見していく、ということをやっている。

もし若い人たちに訴求していくということを考えるのなら、紙は紙であってもいいが、映像の体験や、リモートでの話し合いなども視野に入れるという道もあると思う。

基本的にはデータに基づいた話をしたい。他方で、様々な具体のケースにも関わっているので、そういう具体例の話もしていきたい。それとどうメッセージを伝えるかということとはもっとオープンに考えた方がよい。今日の時点でお伝えしたいことは以上だ。

## 中塚委員

私も前回から引き続きお世話になる。農学部というと、バイオなど生命科学のイメージが強いかもしれないが、専門は農業・農村の経営で、有り体にいうと農業をちゃんと儲かるようにしながらどう維持していくかという話と、農村地域の持続性、地域づくり、村づくりといったことを専門にしている。

この試案でいうと、シナリオ4の沸き立つ起業、7の進化する御食国、19の進む地域経済循環、20の自分たちでつくる地域、21の都市と田舎の共生、22の自然と共にある暮らしの辺りを専門にしている。

今回の論点はなかなか難しいが、最近気になるのは、市場と行政、国の関係性だ。県という立場でいうと、国と県、県と市町の関係性という辺りがすごく気になっている。

例えば最近国が「みどりの食料システム戦略」という前のめりの戦略を作って、有機農業を25%にするという目標を打ち出した。エネルギーに関しても同じように国が前のめりの目標を示している。一方で、市町はそんな高い目標にはついていけないような状況がある。その中で、県がどういう機能を発揮すべきなのか、という辺りはもう少し考える必要があるのではないかな。

有機農業に関しては、私としては兵庫県が1番最初に25%と言ってほしかった。去年からの研究会の議論で、兵庫県をブランド化していく上では、ビジョンで尖ったことを積極的に言う必要があるという話があったが、何分国の方が前のめりにいろんなことを打ち出している中で、県として地域に対してどういうコンセプトを示していくかというところはもっと議論する必要があると思っている。

特に思うのは、去年から議論している中でも「循環」や「再生エネルギー」の議論がかなり出ているが、この部分で世界的な潮流がかなり強まっている中なので、この分野でトップランナーをめざすといったことをもう少し意識してもよいのではないかな。

もう一つは、伝わるビジョンのあり方について。「伝わる」という言い方が一方通行なイメージがあるのだが、もう少し双方向のコミュニケーションを大事にすることを考えるべきではないかな。今のビジョンを作りながら次のビジョンを考えていく素地を作るようなイメージを持って考えていく必要がある。

キーワードで「プロセス重視」とあるように、「伝わる」ことよりも「つながる」ビジョンのあり方というか、双方向にちゃんとコミュニケーションをとっていくようなビジョン



のあり方、媒体の使い方を考えていく必要があるのではないかと思う。

先ほどから議論があるように、紙もあってよいが、今のマーケティングは、ありとあらゆる媒体を使ってやるという方向なので、自動的に意見を吸い上げるような仕組みも含めて、もう少しマーケティング的なアプローチを考えるべき。それも何かを売り込むマーケティングではなくて、つながるマーケティングのあり方ということを考えてよいと思う。

## 野津委員

芸術文化観光専門職大学から参加している。なじみのない名前だが、2週間ほど前に開学した豊岡にある県立の大学だ。これまで但馬地域には4年制大学がなく、但馬に初めて4年制の大学を作るということで兵庫県が推進し、開設に至った。

芸術文化と観光は、人口が減る但馬地域が、より輝いていくための2つのエンジンとなる分野だ。その視点を活かしてこの地域に活力を創出するものとして大学が作られた。私は交通と観光を専門にしているが、ここには但馬代表として呼んでもらっているという認識で、そうした視点から発言したい。

永田委員も話していたが、兵庫県は広い。広いので、但馬にいと何でここは兵庫県なのだろうと思うことがある。豊岡市から兵庫県庁には行くには、JRの特急で2時間20分かかる。鳥取市の方が近い。鳥取県庁だと半分の時間で行ける。神戸に行くのにかかる2時間半弱は、新神戸から新幹線に乗ると新横浜に着く時間だ。神戸から但馬へは、首都圏に行ってしまうくらい時間距離があることを念頭に置いてほしい。しかも新神戸から東京へ行く新幹線は1時間に3本ほどあるが、三宮から城崎に行く特急は1日に3本しかない。但馬から見て兵庫県という枠組みが当たり前なのかということをも真面目に考えたい。

兵庫県は兵庫県でしょう、という考えもあると思うが、実際に県北にいと、何で鳥取や京都ではないのかと思う。だが、兵庫県に所属しているからこうした芸術と観光といった尖った分野を専攻できる大学ができて、全国から優秀な学生が集まり始めているというプラスもある。ともかく、今すぐ兵庫県がなくなるとは思わないが、2050年に本当に兵庫県があるのかは、意識的に立ち返るべきテーマだと思う。

2050年は令和32年。昭和30年には但馬地域に1市18町があった。それが平成30年には3市2町になっている。当たり前と思われている自治体の形も、それだけ変わる。令和30年に、自治体が今の形のままなのかは自明のものとして扱わない方がよい。一方で、多様な地域がつながり手を取り合うことで、強さを持った自治体として歴史を続けていけるということもあるだろう。つながりを意識にすると、強固なビジョンになるのではないか。

今回のコロナ禍で、こうやって神戸の会議室と分断されてしまうということも可視化されているし、行き来しづらくて何で兵庫県なのかとも言える。面と向かって会えないが、同じ仲間だと思えるにはどうするか、このオンライン時代に改めて考えたい。

## 松永委員

私だけ大阪からの参加。去年の将来構想研究会にゲストとして参加した際、自由闊達な議論となっていたのが印象深く、今回お声がけ頂いて即答でお受けした。

専門は地域経済。最初に働いた大学が島根県立大学という過疎地にある大学だったこともあり、それ以来、都市と農村両方の事情を追うように意識している。

兵庫県は都市と農村の両方があり、海も山もある。現場を回らせてもらうことも多く、新温泉町の集落や淡路の沼島にも行き、県土の多様性、都市と農村の両方を兼ね備えた県だということを実感した。日本の縮図のような県だからこそ、兵庫県でポストコロナの30年後の社会を構想することは、日本全体への示唆も深いものになると思う。

昨年、大阪府の同じようなビジョンの作成に携わった。ポストコロナを見据えた修正版ビジョンを作ったのだが、兵庫県と比べて異なる点は、今日のキーワード例を見ると兵庫県は本当に多様だが、大阪は6の方向性（活力を重視する方向性：競争、成長、創造、活力、活躍、イノベーション）が前面に出た政策構想であること。ポストコロナといってもそこは変わらない。また、見せ方の議論もあったが、最終的な報告書は70ページを超えるものになっている。

大阪府の新たな戦略では経済活力を一番重視していて、ゴールはどれだけベンチャーや新産業が生まれたか。だが、コロナ禍で気づかされたのは仕事重視、生産重視よりも足元の生活の安心が大切だということではなかったか。ただ、そうしたことはビジョンの目標にはなりにくく、当たり前と見なしがちだ。会議でも、ウィズコロナ・ポストコロナ時代の価値観の転換の議論が中心だったが、報告書になると最終的に筆頭になったのはやはり経済だった。

大阪との差別化という意味でも、農村部を抱える兵庫県では、キーワード例の1～6の順番に示されているように「個人の自立」や「社会の連帯」を筆頭に出していくことが大事だと思う。ただ、それを哲学や思想として示すときに、心地よいキャッチフレーズになりがちで、具体的にどうやってそれを支えていくのか、政策現場に落としていくのかが見えにくくなる。考え方としてはよいが、耳障りのいいキーワードが並ぶだけになりがちという弱点もあるように思う。

見せ方については、文章だけでなく映像で見せることが不可欠だ。特に若い世代は、映像を見てコミュニケーションを取るのが一つのスタンダードになっている。大学のオンライン講義では映像は不可欠。海外では感性に訴えかけるような地域や都市の紹介映像が増えているが、日本では、とくに都道府県で、映像でビジョンを語っているところはまだないと思う。市町村でも映像を作っているところは少なく、逆に作っているところが目を引く状況だ。私が見た中では長崎県波佐見町の映像が秀逸だった。陶芸で有名な人口2万人ほどの町で、近年移住者が増えている。その波佐見の豊かさを5分くらいでまとめたPRビデオだ。今回、冒頭から「伝わるビジョン」という論点が出されていて、事務局ではもう映像を込みで考えているのかなと受け止めた。ともかく分厚い冊子だけ作って終わる時代

ではない。

## 丸尾委員

県民意識調査からも、医療・介護の充実や安全・安心が県民のニーズとしては高いことが明らかだ。働く人も、帰る場所は家であり、地域なので、地域で暮らすということが人々の生活の基盤であると常々思っている。そのベースが整ってこそ、さらに産業、活力をどう発展させるかという話ができるはずなので、やはり生活のベースをいかに整えるかが、トップに出すことかどうかはわからないが、大事な視点だと思う。

先程来の意見を聞いていて、このビジョンをどう見せるかが大事だと改めて感じた。まずイメージの一致が大事。例えば香川県の「うどん県」やJRの「そうだ京都、行こう」のような、私たちの印象に残る言葉を出せるかどうか。そうしたネーミングに加えて、地域の活動がどう未来のシナリオにつながるかを可視化することも必要。その部分があってはじめて、県民の一体感や、兵庫県に住んで良かったという感覚が得られる。

## 守本局長

ビジョンのキャッチフレーズを考える際に、自治体のビジョンなので地域の発展という目線で考えていくのが普通かと思うが、今回の試案では、個人のより自由な暮らし方、働き方を追求するといった個人目線の記載をかなりしている。個人に焦点を当てたビジョンなのか、地域に焦点を当てたビジョンなのか、これは表裏の関係にはあるのだが、どちらを前面に出すかが一つの論点だと感じた。

その際の前提となる地域や兵庫県が30年先まで同じ形であり続けると考えること自体が果たして妥当なのかという指摘もあった。地域を強調することには、「地域に対する責任」という形で、個人の自由という価値と対立する側面もあることにも気をつける必要がある。

モノの豊かさから心の豊かさへと言われて久しいが、県民意識調査から明らかなのは生活の安全・安心へのニーズの高さだ。つまり社会が不安定化する中で、モノの豊かさが再び求められる時代になっているとも受け取れる。文化などかっこよいことは言わずに、ストレートに安全・安心を謳った方が伝わるビジョンになるのかもしれない。

伝わるビジョンにするためには、一万分の一のスケールでという話もあったが、小さなエリアで社会実験をすることも大事だと感じた。モデルとなるような小さなエリアの映像を作って発信するようなことも考えていきたい。

## 谷口部長

ビジョンは長期の方向性を示す羅針盤となるものとして作る。一方で、目の前にある課題に対する取組は、5年ごとの戦略を立てて、その中でやっていく。行政としてはそのような仕分けをしている。今このコロナ禍の中で、県民の皆さんの安全・安心への思いというのがより強く出てきている状況だが、ビジョンをそれに引っ張られた形にするというよ

りは、今強く求められている取組は、短期の戦略に落とし込んでスピード感を持って対応していくべきものと考えている。遠い将来を見据えたビジョンがあり、短期の戦略の取組が、長期のビジョンのめざす姿の実現に着実につながるものになっている。そのような意味での羅針盤となるビジョンを考えていきたい。

「伝わる」という言い方が一方通行的だ、双方向のコミュニケーションを取れるビジョンにすべきだとの指摘はそのとおりだ。短い時間でビジョンをどう伝えるかは、どういうコンセプトを示すかとも切り離せない。この問題は今後よく考えていきたい。

## 石川委員長

今日はまず阿部委員から、ただ働くではなく、働くことの中で社会に役立つような自分の役割を認識することが大事だとの話があった。その中で、ただただ自由を追求する、自己責任でやっていくというだけではない形を考えるべきだという話もあった。

大平委員からは、子どもや若者に多様な学びの場を提供することの重要性の話があった。

織田澤委員からは、変化のスピードがますます速まる中で、どうあるべきかといった哲学の部分をじっくり考えることが大事との話があった。

坂本委員からは、民間企業のお立場から、スピード感を持って進めるアクションプランの必要性と、県民のニーズをしっかりと捉えて対応することが大事だという話があった。

永田委員からは、多様なアウトリーチをしていくことが大切で、若者に響くもの、高齢者に響くものは違うのだから、いろんなチャンネルを持つことが大事だとの指摘があった。

中塚委員からは、「伝わる」ではなく「つながる」ビジョンだろうとの話があった。双方向のビジョンのあり方を考える必要がある。県民の意見を吸い上げる仕組みも必要だ。

野津委員からは、物理的な距離が県民のマインドを左右するとの話があった。多様性に富む県民の存在を認識することが大事だ。また、2050年に兵庫県は存在するのか、地域の存在意義は何なのか。地域ありき、兵庫県ありきの発想ではない柔軟な発想が必要だ。

松永委員からは、大阪府との対比で、兵庫県らしさを伝えることが重要との指摘があった。伝える力が強い映像の活用など、響く伝え方を考えることが重要との話もあった。

丸尾委員からは、安全・安心を支える基盤の整備がまずは重要との指摘があった。

これらの委員の意見をお聞きして私が感じたのは、まず、この30年の間に、常識が常識ではなくなることがあり得るということだ。兵庫県もなくなるかもしれない。新ビジョンはそうしたことも踏まえて考えていく必要がある。アウトリーチの仕方についても、映像はもちろんのこと、もっと他の方法もあるはずだ。私たち自身のマインドをどう変えるかといったことを常に念頭に置く必要がある。

地域に焦点を当ててるのか、個人に焦点を当ててるのか、という話があったが、地域は個人を支えるべきものとする。大切なのは個人であり、個人の自由度を高めることである。それを支えるのが地域。今人々は案外自由ではない。いろんな制約がある。その制約を少しでも取り払った地域が、人々にとってよい地域、暮らしやすい地域ということになるは

ずだ。このことが雇用、介護、医療など、すべてについて言えるはずだ。一人ひとりの個性、多様性を受け入れる地域が新ビジョンのめざす姿だと思う。

基盤はもちろん必須だが、リスクがあることは個人の自由度を下げることなので、その自由度を下げるリスクをどう低減するかという視点で基盤の問題を捉える必要がある。あくまで基本は、人々の自由度をいかにして高めるかを出発点にして考えるのだと思う。

個人の自由の根本にあるのが、やはり自己決定力だと思う。自由だと言われて、何をどうしたらいいかわからないという状況になるのではなく、自分の道を自分で選択できる、自分で自分の道を切り拓くことができる、その力を培うことが一番大事だろう。

民間企業のようなスピード感で取組を進めることも大切だ。ただ、私たちのめざす30年後の社会はバックカastingで考えたい。理想の未来を描いた上で、何が足りないのかを考えるアプローチだ。一方で、今の課題をしっかりと見据えることも必要だ。長期の視野を持ってバックカastingで考えること、スピード感を持ってフォアカastingでやっていくこと、この両面があることを意識して検討を進めていきたい。

### 織田澤委員

多様な意見があってしかるべきだ。対立軸と思われていることが技術の力で解決できることもある。その意味で、兵庫県がされているDecidimは面白い取組だ。バルセロナがまちづくりに取り入れてうまくいったと評判で、日本でも渋谷などが導入している。私も県のサイトを何度か覗きにいったが、今まさにこの試案について、ああでもない、こうでもないという議論が繰り広げられている。参加者がどんなスケールの問題を対象にすればうまくいくのか、いかないのかといった点が興味深い。

民主主義は時間がかかるものだが、こういうツールを使うことでスピーディに人々の声を吸い上げることができる。一方で、これに参加するということは考えるということでもある。こうしたいろんな面を両立させる技術をチャレンジングに取り入れていくことが大事で、それがビジョンづくりのプロセスのオープン化の一つのポイントだと思う。

### 石川委員長

常識が常識ではなくなるかもしれない、ということの中には、これまでトレードオフの関係だったものが、そうではなくなるということも含まれる。一見ぶつかりそうな意見が実はそうではない、共有できる、ということがあるはずだ。これからも忌憚のないご意見をいただきたい。

(以上)